

架け橋期に非認知能力をつなぐ

植草学園大学・植草学園短期大学学長 なかざわ じゅん 中澤 潤



1 学びの連携・接続

学校種間の連携・接続が進められている。私の所属する植草学園大学・短大は「共生社会の実現」を理念とし、インクルーシブ社会構築の担い手となる小・特支・幼の教員、保育士、理学・作業療法士を養成している。パラスポーツ、インクルージョン、幼小接続、教育とICT、リハビリ・ロボティックスなど現代的課題に応える科目を充実させ、高大連携協定を結ぶ高校でこれらの科目を提供している。高大連携は学びの連携・接続の仕上げであり、高校生が大学の学びの内容を理解し、適切な進路選択をする上で重要である。

学びの連携・接続の開始は幼保小接続から始まる。文部科学省は令和4年度より「幼保小の架け橋プログラム」を展開し、接続の組織づくり、アプローチ・スタートカリキュラムの普及を図っている。千葉県では先行し、平成31年に「接続期のカリキュラム千葉県モデルプラン」が作成された。この時期には教師に支援された遊びによる学びから、教師主導による文字・数を用いた学びへの移行がなされる。この移行の克服には幼保小間の接続への配慮が重要であるが、子供の側の発達の要因もその克服に役割を果たしている。

2 未熟さの力

発達心理学では、幼児の認知的な未熟さの適応上の意義を認めている。例えば、幼児は短期記憶容量が少なく忘れやすい。また自分の能力を客観的に見ることはできず、自己を過大評価しがちである。また大きくなればな

できないこともできるようになるという、成長や将来への肯定的で楽観的な期待をもつ。

短期記憶容量の乏しさは、友達とのめんどろがあってもそのネガティブな気持ちを忘れ、再び仲良く遊ぶことを可能にする。自己への過大評価は、自信や挑戦につながり、結果的にできることを増やしていける。とりわけ成長への肯定的期待は、小学校入学を楽しみにさせる。このように、幼児の認知的未熟さは前向きな姿勢をもたらす適応的なもので、架け橋期の移行をスムーズにさせる。

3 学びへの期待

子供の成長や将来への期待は、学びへの期待でもある。授業で学生に示す映像がある(Honer & Whiten, 2005)。若いチンパンジーとヒトの子供に、パズル箱からグミを取ってもらう。はじめヒトの大人がパズル箱の上面にある穴に棒を刺して2度つつく等の行為をし、その後に取出口からグミを取る。チンパンジーも子供も上手くまね、グミを入手する。

次に大人は、同じ構造の透明の箱で同じ行為を行う。透明なので大人の行為に何ら意味はなく、単に取出口からグミを取り出せばよいことがわかる。これを見ると、チンパンジーは即座にグミを取出口から取る。しかし子供は相変わらず大人の示す一連の無駄な行為を行ってからグミを取る。チンパンジーは教えることはないが、ヒトは教え学ぶ動物である。学ぶ存在である子供は、大人の示す行動には意味があるのだと思い、それを学ぼうとする。学びへの期待はヒトの本質といえる。



4 非認知能力

最近の教育界の話題の一つに、「非認知能力」がある。2000年にノーベル賞を受賞したシカゴ大学ヘックマン教授は、幼児教育への投資が義務教育、高等教育、社会人教育への投資より経済効果が大きいとした（ヘックマン, 2015）。その証拠の一つがアメリカミシガン州の経済的に恵まれていない世帯の3-4歳児を対象に、毎日2時間半の幼児教育と週1回の家庭訪問指導を行ったペリー就学前教育である。これはアメリカの幼児教育で一般的な教師主導型ではなく、子供の主体的な遊び活動を教師が支援するという、ハイスコープ・プログラムに基づいて行われた。

幼児教育を受けた人たちは、幼児期に知能が上昇したものの、その後低下し10歳時点では受けなかった人たちと差はなくなった。

しかしさらにその後を調査したところ、幼児教育を受けた人たちは受けなかった人たちより9歳時の学習意欲や14歳時の学業成績が高く、15歳時で学校への価値感や学業への自信が高く、問題行動が少なかった。19歳時では高校卒業率が高く、有職者が多く収入も高く、非行や犯罪率は低かった。さらに27歳と40歳時でも、収入や持ち家率が高く、犯罪率が低かった。結果的に幼児教育は、それを受けた人たちに有益だっただけでなく、就業者増による税収向上や犯罪減による損失回避など社会にも有益となった。ペリー就学前教育への投資は13倍の利益を社会にもたらした（Schweinhartら, 2005）。

幼児教育を受けた人たちの知能への効果は一時的なものであったにもかかわらず、彼らが学業や社会生活により適応的となったのは何によるのか？ それは、幼児教育を通して獲得された、認知能力（知能）以外の力、即ち非認知能力であろうと考えられた。

非認知能力とは、向上を目指す前向きな意

欲、粘り強さ、欲求や感情の自己調整などである。

私たちは、非認知能力の一つである欲求の自己調整の影響を追跡し、幼児期の非認知能力が小学校の学びや適応へとつながることを見てきた（Nakamichi, Nakamichi, & Nakazawa, 2019, 2021）。年長時の欲求調整力の高さ（例えば、触ってはいけないと言われた玩具で遊ぶのを我慢する）は、小学校1年時の学力の高さと、1年時の学力はその後5年生まで次学年の学力と関連した。興味深いことに、年長時の欲求調整力と学力や仲間関係との関連は小学1年時よりも小学3・4年時で強まった。中学年は学習内容が高くなり、仲間関係も複雑になる。欲求を抑え粘り強く課題に取り組むことや、友達と折り合いをつけることが重要になってくるのであろう。

非認知能力は幼稚園教育要領や保育指針で目標とされる資質・能力の「学びに向かう力、人間性等」に関連する。他の二つの資質・能力とは異なり、「学びに向かう力、人間性等」には「の基礎」がついていない。これは幼児期からその習得はなされるものであり、架け橋期を通して小学校教育も引き継ぎ育成していくことの重要性を示唆している。

5 架け橋期の学びの感激

幼保小連携事業の中で出会ったある小学校の教頭先生は、自身のお子さんには遊びを重視し、文字を一切教えないで小学校に入学させたという。お子さんは、小学校から帰ってくるたびに、「今日は先生からこんな字を教えてもらったよ。学校って本当に良いところだね。」と言っていたという。学校が大好きになったこのお子さんは幸せである。架け橋期は、子供たちが小学校での学びの感激を味わえるようなものでありたい。